

畑で拾った宝物

斉藤 三男

私は、生まれも育ちもこの町であるだけに、昔の街の様子やできごとなどについて興味を持ち、高い関心を持っていた。

小学生の頃の住居は、屈足三十一号から三十二号にあたる西高台にあり、農作業の兄弟たちにつきまとい、自分なりに手伝っているうちに、ある日足元に五匁くらいの光る石を見つけた。どう見ても自然の形でなく、誰か手を加えたものに違いないと子供心に思いポケットに入れて持ち帰り、それを宝物のように大事にしていた。しかし、もっと後になって分かったのは、それはアイヌが狩猟に使った黒曜石のヤジリであった。(後年、道教委の発掘調査でかなりの量が発掘され、縄文時代中期のものと考えた)

このような子どもの時の思い出が心に残っていて、今でも旅行の都度、持ち帰った思い出のささやかな品を自分の部屋に並べ眺め、一人満足している。因みに今までには平成六年(一九九四)の鳥取の砂、三年の青函吉岡海底の石、十五年(二〇〇三)の第二狩勝トンネル掘削時の石、二十一年(二〇〇九)の石切山の石などがある。これからも機会があれば、どこかの砂浜や河原で子ども心に戻ってお気に入りの石などを探したいと思っている。

家畜市場と柴内旅館

金村 優

家畜市場は十勝畜産組合に所属しており、十勝管内の家畜市場は毎年春と秋に五ヶ町村で開

催されていた。新得は毎年十勝管内で一番先に開催されていたが、新得は国鉄の貨車廻りが良いこともあって本州や道内各地からの家畜商の方々の人気もあり市場の評判はとても良かったようでした。

市場開催の早朝は、街全体がまだ静まりかえった状態の中、馬市開催合図の花火一発鳴った途端、街全体のざわめきが聞こえて騒然となり、やがて一時間経過後には二条橋や番外地の道路には人通りが激しくなり、人馬や物売りの店で混雑したものである。

市場関係者が席に着き、組合専従の競売師から「お代はいくら」の掛け声がかかり、大勢の町内外の馬喰のほか、農家の人々も加わり市場は盛会を極めたものでした。そして、競売の価格が高くなると軍馬購買官がさらに高い値をつけ「軍馬お買上げ」の声で決まったものです。

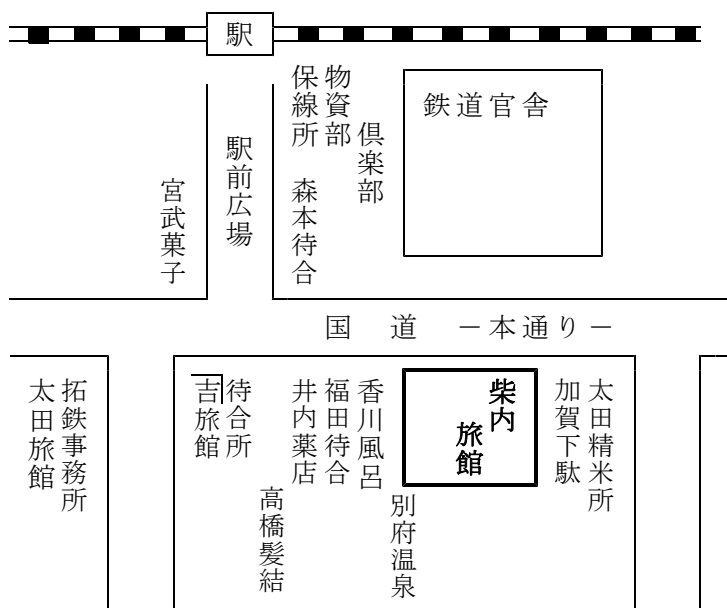
当時、普通の二歳馬でも牧場に四ヶ月放牧して秋の市場に出すと倍の価格で売れたものでした。軍馬になると二百円余の値がつき、購買官は市場における主人公で、皆の注目の的でした。そして、馬市開催時の常宿が柴内旅館でした。

柴内旅館は十勝管内では上級の旅館で、新聞の全道版にもその名が載った程であった。ただ「柴内」では個人名なので改めたらとの意向もあって一時「狩勝旅館」としたが、しかし、柴内幸吉氏は町内の有志としての人望も厚く、町内では誰一人として狩勝旅館という人もなく、柴内旅館で通っていた。

旅館は、本通り側に正面玄関で、客間は一、二階に南北にしてコの字型で、一階に中庭をもつてつないでいて、正面玄関には身の丈程の大型時計が置かれ、入口左には番頭の部屋があり机の上には部厚い宿帳とそろばん、手提げ金庫が整然と置かれていた。食後は、女中さん六人が一斉に全館雑巾がけをするので床面はいつも顔が写る位磨きこまれていた。

一階の中庭には池があり、大きな鯉が数匹泳いでいて、二階の一番奥の部屋には昔の殿様が

座するような格式の高い部屋があった。軍馬購買官の宿泊当日は、午後三時頃より食糧品が次々と柴内に届けられ、白衣を着た調理師さんが女中さんに指図をしてた。午後六時頃になると、町の有志達が次々と顔を出し、料理店の玄月、亀清から十数名接客婦も加わり、全館点灯で中庭の池にも反射して見事な光景で大宴会が行われていた。夜遅くまで繰り広げられるそんな大宴会を本通りの通行人が二重、三重になり物珍しく見物していたものです。しかし、時代の流れは戦時体制下に変わり、物資不足になって柴内旅館は最終的には国鉄に買収され、後に国鉄協和寮となった。



(大正十四年〜昭和二年頃の柴内旅館周辺)

或る探検 記憶を辿って

片桐 直

平成元年（一九八九）四月、新得町図書館の一室において、新得町九十年史の編纂作業を田近正俊氏（故人・元会員）が行っていた。その補助として岩木善司氏（元会員）が当たっていたが、岩木氏が体調を崩され休むことになり、その後任として私が指名されて町の臨時職員として辞令を受けることになった。

田近氏から作業上の分担を指示され、取り敢えず前任の岩木氏が手がけた資料の見直しと追記と訂正などを、七十年史を基本にその後の経過と現在の状況について把握と確認を行いながら原稿を作ってきた。

その後、林業で新得営林署をはじめ各木工場、商工業、町内の各種団体、観光、交通（道路、橋梁、鉄道関係、消防関係、宗教各寺、地名、伝承、碑銘、馬頭さん、災害関係、戦時下の生活など誠に広範であるが、個々について確証を得なければならず、町内は勿論、屈足にもバスで数回出かけて取材を行ってきた。これらの記述はすべて田近氏に見てもらい、毎日のように役場へ持って行き、何らかの指示を受けていた。

四月十九日の朝、役場から戻ってきた田近氏が、広瀬助役（当時の）の話で、昔佐幌川水力発電所の水を南新得一号付近から水路を設けて利用していたとのこと。南新得で生まれ育った私としては全く知らない話であったが、昔吊り橋が架けられていたのを臆気ながら脳裏にひらめいた。

この発電所は、清水町人舞の十七号あたり、佐幌川左岸のガンケを利用して建設され、大正八年（一九一九）十二月二十四日に操業されたと記述がある。発電は三〇〇kwで、新得から水を貰っている関係から本町は早くから電気之恩恵を受け、ランプ生活から脱却することが出来、文化的な生活を送ることができていた。

ところが、昭和七年（一九三二）八月十日夕方、豪雨とともにこの発電所に落雷があり、施設が破壊してしまった。四月二十二日午後、落雷の被害について近くに住んでいる人を調べ、田近氏と二人で下佐幌の山浦家を訪問し、落雷の時の様子などを尋ねた。山浦さんの話では、落雷と同時に大火災となり、大きな火柱が立ち上がり空を焦がさんばかりの勢いであったという。近くの高台に植えてある落葉松の防風林を焼き尽くす勢いであったともいう。山浦家を辞し、二km余り先の発電所跡を二人で見に行った。急斜面の崖を慎重に下りて跡地に立ったが、爆撃に遭った跡のように壊滅しており、コンクリートの残骸が一部残っていた。

発電所の対岸二kmくらいのところに住んでいた私の妻と家族もこの惨状を見ていた。雨の中を部落の人達が畑の縁を現場へ走って行くのが見え、兄も出て行ったが、呆然と見ているだけだったという。

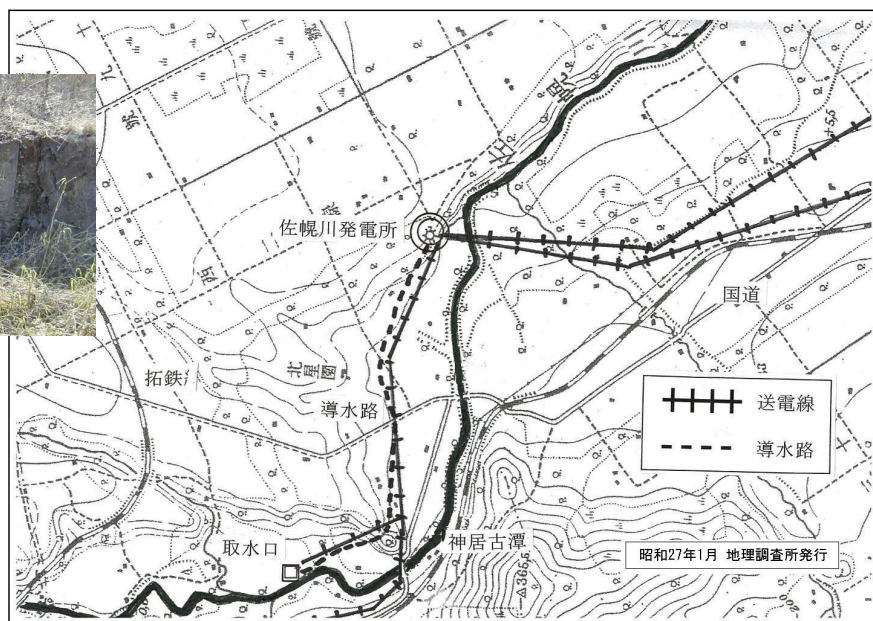
電気の供給が途絶えた町は、また元のランプ生活に戻ることにになり、発電所の復旧を再三陳情するも、徒労に終わったという。

仕事の切れ目を利用した六月八日、南新得一号付近の取水場所を調べに出かけた。カムイコタン橋からすぐ左折し、川沿いの農道を進み一号線とおぼしきあたりから河川敷に踏み込んだ。柳の木は葉を繁らせ、雑木や胸まで伸びた笹、雑草が密生しており、足元に注意しながら探査した。この取水場の構造など事前の知識が無いため、これと思う形が掴めないまま探査を続けること数時間、やがて川岸から約一〇mの場所にコンクリート製の頑丈な堤を発見。周囲が広く掘られ水溜りになっており、正しく取水の水門であることを確認し合った。

水門は二つの導水口をコンクリートで固め、溜まり場には上流の佐幌川のふちから水が導かれ、溢れた水を水門から川へ流すようになっていた。

この発見に喜びと感激に田近氏と固い握手を

交わした。当然に役場関係に報告、教育委員会と郷土研究会にも連絡し、標柱を建て周辺の整備を行ってきたのである。



佐幌川水力発電所取水口跡

開拓者 祖父金助

斉 木 信 道

私の祖父金助は、三十六歳の明治三十六年（一九〇三）に弟に家督を譲り、北海道に渡った。同行した祖母與祿が三十三歳、私の父勘助が十六歳の時であった。三人は、北海道開拓を目的とした岡山団体二十戸に加わり、岡山から遙々船旅で広尾村に上陸した。

祖父たちは広尾からアイヌ人に頼んで二日かかりでチロツト（白人―現在の幕別町）に入植したが、五戸はニトマップ（人舞）に入植したという。北海道開拓は国策として進められていたので、このことはアイヌ人たちも分かっていた。開拓者の荷物の運送などに携わっていた。仕事とはいいいながらでもアイヌ人は皆親切だったようである。

チロツトに着いた金助はなにもあれ家族のための住居を建てることにし、先に住んでいた人のマネをして坪み小屋を造ることにした。付近の湿地に生える茅などを刈り取り、丸太の柱に積み重ねて壁や屋根を作っていた。住居といっても単に雨露しのぐだけの簡素なわらぶき小屋で、零下二、三十度になると掛け布団が息で白くなった。こんな小屋でも故郷遠くを離れて来た金助にはなにもものにも代えがたい「我が家」であった。

食事は、毎日がヒエカ栗のごはん、山菜をおかずにしたカンタンなもので、まれにアイヌから鹿肉やウサギ肉が手に入ったようである。また、近くの小川に上がつてきたサケやどじょう、カジカなども煮付けにして食していたという話を金助から聞いた。アイヌは血縁で結ばれ、小さな集落を作って住んでいた。そこは「コタン」と呼ばれていて、一戸でも人家があればコタンであった。当時のアイヌは文字を持たない民族であったが、和人とはなにかにつけて交流があったという。

開墾は、家の周りのうっそうとした巨木の伐採からはじめたが、毎日毎日が巨木と生い茂った笹などとの闘いであった。開墾鋤で一畝一畝のまさに遅々

とした作業であった。倒木して薪にしたほか、薪にならないものは焼却して肥料の代わりにした。近くに店がないので買い物は五里くらい離れた帯広まで出かけた。明治二十二年（一八八九）生まれの当時十六歳の父勘助は、金助から買い物帳を預かり買い物をしたと言っていた。

こんな苦労話を祖父母、父から良く聞いたものである。この苦労があつて今の私たちの生活、幸せがあることを忘れることはできないし、祖父母は口うるさい人であったが、苦労の上ですべての物を大事にするということを教えてくれた。

私が六十一年以上前に聞いた話であるが、足跡の一端を記して祖父母、父母の恩に報いたい。



新内郷土史料収蔵庫
収蔵番号328号
新得機関区庁舎
「金属製標識プレート」

新得機関区は、昭和二十七年（一九五二）三月の十勝沖地震で機関車庫、庁舎などに大きな被害を受けた。翌年一月にはブロック建築の機関区庁舎が完成したが、その時庁舎に「新得機関区」の金属製の標識プレートが取り付けられた。

二十九年（一九五四）十二月には鉄筋コンクリート造りの近代的な機関車庫も完成した。この車庫は扇形で、車庫前には二十台の転車台があり、機関車収容能力は十両であった。

大正六年（一九一七）四月に設置された新得機関区は、昭和六十年（一九八五）三月をもって六十九年の歴史を閉じた。

十勝随一の桜の名所「新得（神社）山」

新得（神社）山の南斜面一帯は、春の訪れと共にエゾヤマザクラの花が咲き誇り、その見事な景観は、十勝随一の名所として広く知られています。

その見事な桜は、大正八年（一九一九）伊藤傳五郎が新得神社の移転を記念して、桜の苗木二三〇本を寄贈した植樹「悲願桜」に端を発しますが、傳五郎の行為は、その後共感を呼び、住民たちは毎年苗木を植樹し、やがて三千余本を数えるまでになりました。しかし近年、植樹した桜は雑木の生長や病害虫により年々衰退。更に老木化も加わり、その面影を失いつつあります。

平成十九年（二〇〇七）、その桜の全盛期を再現させ、後世に残そうと願う有志が結集し、立ち上がり、「花咲爺さんの会」が組織されました。そして現在も、町の花エゾヤマザクラの保存のために、住民の積極的な活動が進められています。



五ヶ瀬町と姉妹町提携の交換林

新得町と宮崎県五ヶ瀬町が、昭和六十三年（一九八八）に姉妹町の盟約書を締結し、両町が記念のため町有林を交換してから二十余年になります。

五ヶ瀬町には、杉・檜の山林1.4ha（52年生）そして新得町（新得山北西側、福山の南斜面）に、カラマツの山林3.6ha（44年生）が植樹されており、現在もこの記念樹は両町ともに立派な大木に生長しています。